

大学定年 10 年～あれこれ

鳥取大学大学院工学研究科 鳥取大学名誉教授

古 田 武

慌ただしかった定年前後のこと

2009年に鳥取大学を定年になって以来10年が経過する。「やっと10年」、「もう早10年」の感がするが、一つの区切りであるから、この間を「つづやき調」で回想したい。定年間際に研究室が継続されない旨の宣告を受け、1年かけてバタバタと研究室の終末作業をおこなった。幸い香川大学で研究室が受け継がれるようになったのは、当時の准教授の先生のためめぬ努力に他ならない。ということで、定年後の生活に関してはほとんど将来計画を持たぬまま、膨大な自由時間の生活空間に入っていったのが正直なところである。

Journal の論文査読

論文の査読は非常に重要な作業であるが、その重要性は十分認識されていないのが現状である。その要因の一つは、査読という時間のかかる作業が（一部を除き）全くのボランティアであり、かつ、本国においては研究者の業績として全くといってよいほど評価の対象となっていないことにあると思われる。研究者、特に大学や公的な研究機関の研究者は、教育や研究という本来の仕事に加えて、法人化以来、外部研究費の取得が研究継続の生命線となっているため、コストパフォーマンスが最低な査読などに関わってられないであろう。私も現役時代は査読を引き受けるのが正直苦痛であり、期限が迫ると脅迫に似た感じを持ったものである。

定年後ひょんなことから、Drying Technology 誌の編集委員を委任されることになり、査読を依頼する側に回ってしまった。現在もそうであるが、私のところに回ってくる担当論文は、日本を除くアジア（特に東南アジア）、中東、南米（ブラジルが中心）が多い。初期には中国の論文もあったが、10年前には論文の英文に誤

りが多かった。現在は非常にきれいな英文で書かれたものが多く、大量の中国人留学生が渡米・帰国して教育・研究に当たっている表れと思われる。特記すべきは、近年の中国の大学で使用されている研究機器が最新鋭のものであるということである。十分に使いこなされているかどうかは別として、将来の科学研究・技術のリーダーとしての国家を挙げての準備であろうか。

私は責任編集委員として、担当論文を私なりに丁寧に査読しているつもりである。かなりの時間がかかるが、時たま新しい発見があり、これにやりがいを感じている。査読に関して大変役立ったのが「電子ジャーナル」のパッケージであった。定年時に鳥取大学図書館に掛け合って「電子ジャーナル」の学外使用を許可してもらった。多分、社会人博士課程学生用のものを流用させてくれたのではないと思う。これは編集と査読作業をおこなう上で非常に役立った。便宜を図っていただいた当時の図書館学術系の担当者に敬意を表したい。このパッケージによって、同著者の類似論文を見つかることができたり、全く同一のSEM写真が既往の論文に掲載されていたのを発見できたりもした。公正な査読と編集をおこなうためには必須の「道具」であると思っている。この特権(?)はその後「名誉教授版」として継続使用できていたが、昨年4月で終了してしまった。継続には学内研究者との共同研究が必要との理由である。「電子ジャーナル」を広く国内研究者が利用できるシステムを国として作るべし、という主張を以前目にしたことがあるが、今にして思うと正にその通りと言わざるを得ない。私の家から15分のところに京都大学の図書本館があるが、せめてここで国会図書館での閲覧並みのサービスが受けられないであろうかとも思う。

Takeshi FURUTA

1966年 姫路工業大学産業機械工学科 卒業
同年 京都大学工学部化学工学科 助手
1983年 東亜大学工学部食品工業科学科 教授
1991年 鳥取大学工学部生物応用工学科 助教授
1995年 同 教授
2008年 鳥取大学大学院工学研究科 教授
2009年 同 鳥取大学名誉教授

京都大学工学部化学系4号館

定年後5年ほどして、22年間住んだ鳥取を引き上げて京都市の現住所に引っ越したのは、家族の希望もあったが、研究者としての出発点に帰りたい私の願望でもあった。学部を卒業して大学研究室の助手になるような道は現在ではほとんど考えられないが、昭和41年当時には事例が多くあった。私のいた京都大学工学部化

学系4号館は当時新築の建物であった。中身は全く変わっているが現在でも、百万遍交差点の東南に残っている。傍を通るたびに当時に思い出している。考えてみると、この地点から福井謙一先生、野依良治先生の2人のノーベル賞学者が輩出されたのである。福井先生の受賞は私が4号館の住民であったころのできごとであり、非常に興奮したのを覚えている。研究室の教授の使いで書類をお届けしたことがあるが、広い部屋に机が一卓ぼつんとあるのみであった。現住居から5分くらいの所に「福井謙一記念研究センター」の建物があるが、かまぼこ形の飾り気のない建物で、福井先生

を連想させる。4号館から南西に5分ほど歩いたところに京都大学医学部がある。本年のノーベル賞医学生理学賞受賞者の本庶祐先生の出身学部である。医学部としては悲願のノーベル賞であったと思われる。

現在も百万遍は学生が多く混雑しているが、工学部は桂地区への移転で今は無く、一抹の寂しさを覚えている。4号館のかつての居室が垣間見えるのがせめてもの慰めである。ずいぶん昔の話になるが、「京都は地域的に狭く、浴衣掛けで議論できる絶好の場所です」と東京の某先生がつぶやかれていたのを思い出す。